



第八卷第七號

保育上に於ける自然主義の誤用

自然主義と云ふと又八益しい文藝論かと云はれるかも知れないが此處に云ふ自然主義は保育上即ち幼児教育上の問題である。

放膽な幼児教育者は保育上に於ける自然主義を極端に迄發展して幼児は自然に任かす可きもの、些の規制も加ふ可からざるものとして氣隨氣儘に行はしむるものがある。其結果は單に幼児は度す可からざる我儘者となり終つてしまふ。是は飛んでもない誤りである。自然主義者は方今教育上に於ける根本原則ではあるが其は被教育者の性狀に適應して教育すと云ふ點に於ての語で決して自然に任せ自然の趨く所のみ放還す可きものと云ふのではないのである。斯る誤解は動もすれば筋道のわかつた地位ある人の家庭に時折見出されるもので貧乏人の家庭には比較的少ない様である。元來躰を八益しく云つて子供をいぢめるのが我國一般の舊習であつたのに是は又反對に放縱に過ぎて居る。吾人は子供を作法詰や規則詰にすることを以て幼児教育上有害であると信ずるとはいへ然りとて之を極端に放任することが決して利益であると信ずることは出来ぬ。子供は壓制す可きものではない。併しなから同時に絶体の自由を許す可きものでもない。人生は目的を有し教育には具案がある教育者の求る所を實現せんには多少は幼児自然の行動を制するの必要があるのは當然のことである。併しなから從來の教育は徒らに壓制に過ぎて居る。吾人の叫ぶ所は此の不要なる壓制を除いて適切な自然主義の教育を施さんとするにある。是をこれ察せずして徒に我意に奪れる幼児を放置することは戒めねばならぬ。(湘雨)